

時間表現で用いられる指示詞に関する認知言語学的考察

－「コ系指示詞＋空間表現」と「今＋空間表現」の対比を中心に－

0. 問題提起

本研究では、「空間表現と共起するコ系指示の時間表現」の特徴について、「今と共起する空間表現」との対比からの考察を行う。そして、「今」と「絶対指示のコ系時間表現」との差異を明らかにすることを目的とする。従来、コ系指示詞の時間表現は、「今」との関連性が深いことが指摘されてきた。「コ系指示詞の時間表現」としては使用可能な語が、「今」とは共起不可能であるという例が存在する。

- (1) a. {この先／*今の先}, どうなることか。
- b. {この先／*今の先}, 一生会うこともないかもしれない。

(1)において、「今の先」を使用することはできない。では、「今の先」が使用できず、「この先」が使用できるのは何故なのであろうか。また、先のみならず、以下のような多くの空間語彙が「今」とは共起することができない。

今のところ	このところ
?今の前	この前
?今の後（今後は可）	この後（あと）
?今の先	この先
?今のあたり	このあたり
?今のあいだ	このあいだ
今のうち（に）	?このうち（に）

こうした現象に対して、本論文では「視点」と「方向性」の観点から分析をおこなう。そしてコ系時間表現は国広(1997)のいう「眺望視点」を持ち、一方向性を持つ表現であるために「前」や「後」、「先」などと共起可能であるのに対して、「今」には「前」や「後」を認識する際の基準となる「方向性」が存在しないそうした空間語彙と共起しにくいという結論を導く。

1. 先行研究

コ系指示詞と現在の関連性を指摘する研究は従来から存在する。

堀口(1978)では「絶対指示」という概念が提唱されている。絶対指示とは、「場所・時間

に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する用法」であり、「時間に関する用法は、近称だけ」である。

また、金(2004)では、堀口の「絶対指示」を発展させた「指示詞の象徴的用法」という概念が提示されている。「指示詞の語根を選ぶ余地が残されていない、常に特定の時間と場所、程度を指示する用法」であり、「発話の状況 / 直示の中心に関する情報があれば、指示対象が一意的に決まる」ものが指示詞の象徴的用法であると定義されている。そしてそれはソ系やア系による代替が不可能であるという指摘がなされている。

このように、コ系指示詞と現在が深い関連を持つ。では、それらコ系指示詞の時間表現と「今」を含む時間表現との間には、どのような相違点が存在するのであろうか。

2. 分析

本論ではまず、「先」が「今」と共起しない理由について分析する。

国広(1997)では「マエ」と「サキ」の多義性を説明する際、「客観的視点」と「眺望視点」の2つの視点をを用いて両者の違いを説明している。「客観的視点」とは、「サキ」が過去を表す事態である。それに対し、「眺望視点」の場合は「サキ」が未来を表し、「マエ」が過去を表す。コ系の時間表現は「この前」が過去を表し、「この先」は未来を表す。したがって、コ系時間表現は「眺望視点」を持つ。

そしてここから、コ系絶対指示の時間表現には「方向性」が存在することを指摘できる。また、「この先」の「先」は碓井(2002)での「先」の分類の中では「未来のサキ」に該当する。この構造においては「認知主体自身が参照点となるのであるから発話時点は認知主体の位置する現在となる」として、以下のような例が挙げられている。

- (2) a. サキが思いやられる。
- b. おサキ真っ暗

(碓井 2002:156)

そして未来の事態を指示することが可能であるのは、先が持つ「方向性」によるという分析がなされている。この碓井(2002)の分析からも、「この先」が方向性を持つことを裏付けることができる。

それに対し、「今から」が過去と未来双方を指示することが可能であることからわかる通り、「今」の場合は過去と未来双方に「開かれた」語彙であり、一方向性は存在しないと考えられる。

- (2) a. {今から／*これから} 50 年前
- b. {今から／これから} 50 年後

渡辺(1995)にあるように、「サキ」は「方向性を持つものの先端」を指す。「今の先」が不可能であるのは、「今」が方向性を持たないためであると考ええる。また、「今の前」や「今の後」などが使用不可能である理由も同様に、「今」には「前」や「後」を認識する際の基準となる「方向性」が存在しないからであると考えられる。

3. まとめと展望

以上をまとめると、「コ系絶対指示の時間表現」と「今」の差は、また、視点による「方向性」が存在するため、「前」や「後」、「先」といった空間語彙がコ系時間表現とは共起可能であるのに対し、「今」にはそうした方向性がないため、空間語彙とは共起不可能であるという現象が生じる。これが本論文の結論である。また、本発表では、以上の内容を中心として、さらに「方向性」とスキミングなどの関連性も指摘していく。また、「この瞬間」と「今の瞬間」の相違など、空間語彙以外が用いられる表現の相違点についても可能性であれば言及する。

<参考文献>

- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis*: CSLI Publications.
- 浜田秀. 2005. 「名詞にかかる「今」・時間副詞と名詞の関係に関する試論」, 『山邊道』(49), pp. 1-20.
- 潘鈞・小澤伊久美. 2006. 「時間認識は言葉にどう表れるか」, 『月刊言語』 35(5), pp. 44-51
- 堀口和吉. 1978. 「指示語の表現性」, 『指示詞』 pp. 74-90.
- 堀口和吉. 1990. 「指示詞コ・ソ・アの表現」, 『日本語学』 9pp. 59-70.
- 入不二基義. 2002. 『時間は実在するか』 東京: 講談社.
- 木村英樹. 1984. 「時点表現の副詞的用法について・中国人学習者にとっての難問から」, 『日本語教育』 (52), pp. p65-78
- 金善美. 2004. 「現場指示と直示の象徴的用法の関係・日韓対照研究の観点から」, 『日本語文法』 4(1), pp. 3-21
- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」, 『自然言語処理』 6(4), pp. 67-91
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』 東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*: Vol.1, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions" *Cognitive Linguistics*, Vol.4, No.1, pp.1-38:
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*: Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics 2* Cambridge University Press.

- 日本語記述文法研究会（編）. 2008.『現代日本語文法 6 第11部 複文』東京:くろしお出版.
- 粕山洋介. 1989.「現代語「トコロ」の意味的・統語的・文体的特徴」,『Litteratura』(10),pp. 1-23.
- 仁田義雄. 2002.『副詞的表現の諸相』東京:くろしお出版.
- 李 長波. 2002.『日本語指示体系の歴史』京都: 京都大学学術出版会.
- 篠原和子. 2002.「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」,『ことば・空間・身体』 pp. 179-211.東京:ひつじ書房.
- 竹内直也. 2007.「「これまで/から」・「今まで/から」の意味的相違について」,『日本エドワード・サピア協会研究年報』(21),pp. 27-37.
- 寺村秀夫. 1984.『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京:くろしお出版.
- 碓井智子. 2002.「空間認知表現と時間認知表現 日本語「サキ」の認知言語学的考察」,『日本認知言語学会論文集 2』 pp. 150-159.
- 碓井智子. 2003.「空間から時間へ-「アト」(跡・後)の認知的観点からの考察-」,『日本認知言語学会論文集 3』 pp. 63-73.
- 碓井智子. 2004.「空間から時間へ ～写像の動機付けと制約～」,『言語科学論集』 pp. 1-17.
- 渡辺実. 1995.「所と時の指定に関わる語の幾つか - 意味論的に」,『国語学』 181pp.18-29.
- 山梨正明. 1992.『推論と照応』東京:くろしお出版.
- 山梨正明. 1995.『認知文法論』東京:ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京:くろしお出版.
- 吉本啓. 1992.「日本語の指示詞コソアの体系」,『指示詞』 pp. 105-122.